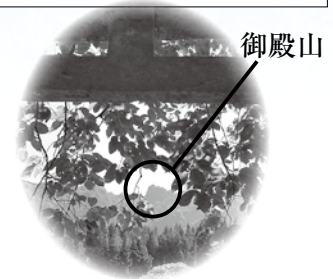


# 新編 知立市史だより

## 第10号



献上  
小代山  
八幡宮  
寛文八申年  
五月十五日  
三州池鯉鮒町  
永田清七郎  
内



遥拝所から八幡宮があった御殿山を望む

奥三河にある御殿山（設楽町）の険しい山腹に八幡宮跡がある。そこには、池鯉鮒（知立）の永田家が奉獻した手水鉢が残されているという情報を得て現地調査を行った。この八幡宮（現八幡神社）は文禄2年（1593）に奥平久府尉久矩建立と、明暦2年（1656）鳥山牛之助精明再建の棟札が残っている（『設楽町誌』村落誌）。その後、明治12年に巖嶽神社境内に遷され、今は現地を訪れる者はいない。八幡宮跡を目指したが、当時の参道がわからないほど参道は崩れており道なき道を登っていく。当時は整えられていたものの、急な斜面を登りつめてこの場所まで来てお祀りをするのは容易なことではなかったことと思われる。そのため、麓には八幡宮があった御殿山が正面に見える場所に遥拝用の鳥居が建てられたのである。たどり着いた先の石段を登ると、拝殿跡の正面に手水鉢があり、それには、寛文8年（1668）東海道池鯉鮒宿本陣永田清七郎妻（瑠璃）が奉獻したと記されていた。こういった経緯でこの八幡宮に奉獻されたのかはわかっていないが、この地域は江戸幕府の直轄地であり、瑠璃の祖父にあたる三河代官鳥山牛之助精明と父の精元が管轄していた所縁の地であったのである。

## 刊行記念講演会を開催しました

新編知立市史第6回配本となる『資料編 民俗』の刊行を記念して、令和元年六月二十九日(土)に知立市文化会館(パティオ池鯉鮒花しょうぶホール)において講演会を開催しました。

講師は、民俗部会長の鬼頭秀明先生と民俗部会調査協力員の大野麻子先生です。講演内容については、今回刊行しました『資料編 民俗』に書かれた内容や書ききれなかった調査の内容を含めお話しいただきました。

また、講演に併せ「ちよつと昔の道具展」を開催し、知立市歴史民俗資料館に収蔵されている道具を展示しました。展示をご覧になられた方の中で、実際に使われていた方もおみえになり、今では懐かしい道具ではなかったかと思えます。

### ■講師

・鬼頭秀明氏 (民俗芸能研究家)

「知立地域の祭礼文化

―マチとムラの祭りと芸能―」

・大野麻子氏(蟹江町文化課主任学芸員)

「ちよつと昔の知立の住まいと暮らし」



### 講演内容

#### ■「知立地域の祭礼文化―マチとムラの祭りと芸能―」

鬼頭 秀明

この度、『新編知立市史7 資料編 民俗』を刊行することができました。聞き取りや資料の調査などで多くの方々から御協力いただきました。厚くお礼申し上げます。すでに成果の一部は本市史だより第九号でも紹介しました。

編さん期間中に「知立まつり」は、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。また資料の見直しでからくりの「百合若灯籠」は、残されていた箱銘から『中町祭礼帳』にある人名と符合したことで、実際の祭礼で使われたオリジナルである可能性が浮上りました。それは中町のからくり人形芝居「百合若高麗軍記」です。知立神社が鎮座するマチと、周囲に点在するムラで繰り広げられた祭礼には、「宮神楽」または「宮流神楽」と呼ばれる、神子舞をとまなう神楽が奏叩されています。それは熱田神宮と深い係わりのある神楽だとされていましたが、神社の記録でもある「亮円日記」の記述から楽人は熱田の社家、神子は名古屋の繁昌院の巫女職が、知立神社に訪れていたことを確認できました。現在では

知立神社神楽保存会が年間を通じて活動しています。

このように知立地域で展開された祭礼には、他にもまだ埋もれたものも存在するかも知れませんので興味が尽きません。



## 講演内容

■「ちょっと昔の知立の住まいと暮らし」 大野 麻子

『新編知立市史』の民俗調査で話者の方からお聞きした、昭和初期から中期にかけての住まいと暮らしについて紹介します。

昔の住まいは、街道沿いの町場では店舗兼住宅のいわゆる町屋といわれる造りでしたが、農家では広い敷地の北の方に母屋、周囲に付属小屋が配置され、母屋は田の字に四つの部屋が並んだヨハチとかロクハチなどと呼ばれる間取りでした。家具はあまりなく、食事はゼンバコ（箱膳）を使い食事をしました。

農家の一日の暮らしは、夜明けとともに起き、夏であれば田畑で一仕事してから朝食をとり、出かけて日が暮れるまで野良仕事をし、家に戻り夕食をとり、風呂に入ってから、男は藁仕事、女は針仕事などを遅くまですることもありました。有松や鳴海に近いことから、副業で絞りの内職をする方も多くありました。

知立では昭和二十七年から簡易水道の整備開始、昭和三十年頃にはガスが使われ始め、住まいや暮らしも変わっていききました。

昔の暮らしは、日々苦勞の多いものでしたが、その分、祭りなどの行事が、ごちそうを食べる機会が多かったが、その分、祭りなど

今よりもメリハリのあるものでした。そのような経験を伝えてくださった話者の方々に敬意を表したいと思います。



## ～“ちょっと昔の道具展”～

in花しょうぶホール



(写真左) **お櫃・イズミ**：炊飯器や保温ジャーが普及する前は、かまどでご飯を炊き、炊き上がったご飯をお櫃に入れた。冬は藁で作られたイズミに入れてご飯が冷めないようにした。

(写真右) **ゼンバコ・箱膳**：中には茶碗や皿などの食器が入っており、食べる時に蓋をひっくりかえしてその上に食器を置いて食事をした。



(写真右) **綿繰り機**：綿の実の種をとる道具。「ろくる」とも呼ばれた。細長い板の上に膝をのせて座り、上方の二つの丸棒の間に綿の実の繊維を差し込み、ハンドルを回すと、繊維だけが向こうに行き、種が手前に残るようになっている。

(写真左) **糸車**：綿から糸を紡いだり、糸に撚りをかけたり、杼(ひ)に装着する細竹に糸を巻いたりする道具。右手で取手を回しながら、左手に持った綿をとがった「つも」の先にひっかけて少しずつ後ろに引くと、撚りが綿に伝わり、繊維が絡まって糸ができる。



(写真中央) **絞り台**：布を絞る道具。下に伸びた板の上に座ることで台を固定して作業した。このあたりでは、縦引き鹿の子絞り・横引き鹿の子絞り・皮巻き絞り・巻き上げ絞りなどが行われていた。

(写真中央手前) **ぎり**：絞り用の糸を巻きつけておく道具。「きり」とも呼ぶ。これを手の中に握って糸を出し、布を絞った。

## 版本『伊勢物語』にみる「八橋」の図様

知立市内には業平塚や在原寺・八橋古碑など、『伊勢物語』「八橋」の場面に縁のある史跡が点在しています。『伊勢物語』は在原業平に擬されることが多かった男性貴族が主人公の物語です。

都では無用の身であると思いつめた主人公が友人を伴って京都から東の方を指して旅に出かけたという第九段の冒頭を飾るのが「八橋」の場面で、「三河の国八橋」にたどり着いた一行は、幾筋かに分かれる川に橋が架けられた傍らで軽い食事をとることにしました。そのとき、咲き乱れる杜若かきつばたを見た同行の人から和歌を詠むように促された主人公が詠んだのが、有名な「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」という和歌で、それを聴いた人々は感涙にむせびました。



図1『伊勢物語』(当館所蔵)

人々が『伊勢物語』に親しむことができようになつたのは江戸時代に入り木版印刷された本(版本)が販売されるようになってからで、その多くには挿絵がついていました。知立市

歴史民俗資料館にも『伊勢物語』の版本が何点か所蔵されていますので、「八橋」の場面の挿絵を見ていくことにします。

図1は寛文十二年(一六七二)出版された本の挿絵ですが、この本は寛文二年に刊行された本を覆刻したものであることが知られています。描かれているのは三人の男性貴族が幔幕まんまくの前で敷物の上に座っている姿で、それぞれの前には折敷おしきに載せられた食事が見えます。画面左上には板橋が渡された水面に杜若が咲いていますが、座を囲む三人が杜若に特に注意を向けているようには見えません。『伊勢物語』の話に従って、旅の途中の食事の様子を描いていると考えられます。また、画面上部には「みかわの国八はし」と地名が記されています。

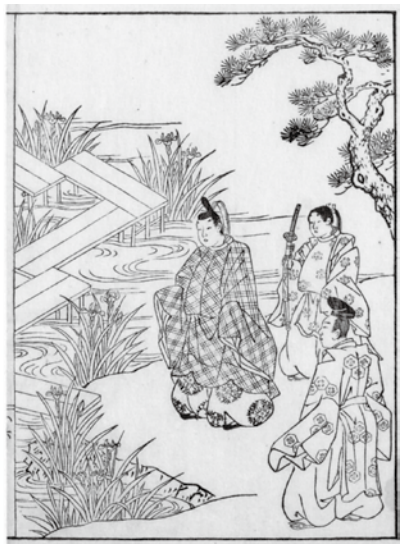


図2『改正伊勢物語』(当館所蔵)

図2は延享四年(一七四七)に出版された『改正伊勢物語』の挿絵で、京都の浮世絵師である西川祐信すけのぶ(一六七一一七五〇)が下絵を手がけています。図1と比べてみると、人物の姿や位置が全く異なります。主人公・右下の男性・太刀を持って従う童の三人はいずれも岸に立ち、主人公は目の前の水面に咲き乱れる杜若を見つめています。『伊勢物語』の話に忠実であるより和歌に焦点を当て、杜若と主人公の関係を強調したのではないかと考えられます。図3は宝暦六年(一七五六)に出版された本



図3『絵入伊勢物語』(当館所蔵)

の板木を用いて明和二年(一七六五)以降に刷られた本の挿絵で、大坂を拠点に活躍した絵師である月岡雪<sup>せつてい</sup>鼎(一七二六?~八六)かと思われる月岡丹<sup>たんげ</sup>下が下絵を描いています。一見

したところ図1に似ているに見えますが、幔幕や敷物はなく、折敷ではなく三室に食事が載せられています。そして何より、左手前に描かれている後ろ姿の男性は顔を杜若が咲く水面の方に向け、左手もそちらを指すかのように少し高くしています。つまり、食事の場面を描くとともに、杜若に注目した同行の人が主人公に和歌を詠むよう促す様子を表していると考えられるのです。

ここに見たように、同じ話に基づいて描かれていても同じ図柄になるとは限りません。絵師により、また物語の解釈の仕方により同じ場面でも表現のし方は多様です。その一方、古くから描かれてきた伊勢物語絵などの場合、図様、つまり描かれた人物の姿態や位置などが同じ時代の複数の作品に見られたり、後の時代の作品に引き継がれたりすることがあります。図様の継承や影響関係は絵画作品だけでなく版本の挿絵にも見られます。

『伊勢物語』を印刷した最も古い本は、慶長十三年(一六〇八)五月に出版された嵯峨本と呼ばれるものです。嵯峨本とは京都の豪商角倉素庵<sup>すみくらそあん</sup>が木製の活字を用いて刊行した一連の本のことです。

『伊勢物語』に挿絵を入れるのも嵯峨本にはじまるのですが、その後出版された版本の多くは嵯峨本に倣っています。後に続く版本のほとんどは絵入りで、元禄年間(一六八八~一七〇四)近くまで、嵯峨本と大きな変化は見られなるとされているのです。

実は、図1の挿絵も嵯峨本とほぼ同じです。画面上部に地名を表示している点は嵯峨本に見られませんが、人物などをやや小さくするものの図様は一致しています。嵯峨本と明らかに異なる挿絵が見られるのは、浮世絵師として知られる菱川師宣<sup>しもののぶ</sup>(?~一六九四)が下絵を描いた『新版伊勢物語頭書抄』が延宝七年(一六七九)に出版されて以降のことになります。嵯峨本以来主人公たち三人が水辺に座っていたのに対して、師宣は全員立ち姿で表し、水面に咲く杜若を見ている様子を描いたのです。しかし、師宣の図様が広まったからといって、それ以降に出版された版本の挿絵が師宣図様一色になったわけではありません。嵯峨本や師宣の図様を踏まえつつも、それぞれの本で人物の姿に工夫を加えて表すようになっていきます。図2の挿絵で人物が全て岸辺に立って杜若を見ているのは師宣図様を踏まえたもので、人物の一人を太刀を持つ童に換える工夫を見せるものだったのです。また、図3の挿絵は、嵯峨本図様を踏まえつつ人物と杜若の関係を強めようとして生み出されたものだったのです。

(八橋グループ 安田篤生)

## ひとつひとつ史実を確定しながら

『新編知立市史1 通史編 原始・古代・中世・近世』の刊行を控え、近世部会でも既刊の資料編に掲載できなかった資料群をも改めて読み直しながら、原稿執筆に努めているところです。

江戸時代については、色々なことがすでに分かっているように思われるかもしれませんが、実は分からないこと、簡単に確定できないことも少なくなく、そうしたひとつひとつを確認しながら



写真：部会の様子

通史の叙述を進める必要があるので、思うようには作業がはかどらないのが現状です。

たとえば、知立地域の江戸時代は、刈谷藩の支配下になりましたが、その支配組織・行政組織がどのようなようであったかが一目で分かるような一覧表があるわけではありません。

そのため、『資料編近世』に収録した地域

争論の史料（史料番号188 享保十四年牛田村・池鯉鮒町野山争論裁許状（裁許絵図裏書））の末尾に「榊勘太夫」「筑猪右衛門」

「小助之進」といった人名が列挙されており、これらの人々が右の争論の裁決に関わっていたことが分かっていますが、彼らがいっただい何者なのか分かりません。

そこで、『資料編 近世』に収めた十八世紀前半の刈谷藩主三浦家の家老日記を読み進めてみます。すると享保十四年（一七二九）五月の項目に

十六日、○今日、京都所司代牧野河内守様が池鯉鮒で御休み（になるといふので）、…町奉行筑摩猪右衛門・御物頭戸村源兵衛・御用人小原助之進・御目付榊原勘太夫（の四名が池鯉鮒町（の）入口まで（出迎えのための）御使者（を勤める）

とする記事（筆者現代語訳）が現れます。この記事によって、享保十四年の刈谷藩では誰が町奉行・物頭・御用人といった役職に就いていたかが具体的に分かり、先の史料に出てきた「榊勘太夫」「筑猪右衛門」「小助之進」が、それぞれ刈谷藩の御目付や町奉行・御用人であったことが初めて分かるという次第です。

こうしたいささか迂遠とも思える作業をひとつひとつ積み重ねながら、知立地域の江戸時代がどのような人々の営みによって構成されていたのかを明らかにできたらと考えています。

（近世部会長 池内 敏）

# 活動記録

(平成30年4月1日～31年3月31日)

## 編さん委員会

平成30年8/10

## 編集委員会

平成30年4/15、7/1、10/27、平成31年2/3

新編知立市史通史編の構成・体裁についての各部会からの審議案件について検討し決定していきます。

## 部会

### 考古部会

○部会 6/24、9/23、12/16、平成31年3/2

○打合せ 5/18

○追跡調査 10/3、10/11、12/13

○データ作り 10/23

通史編に向けて、目次案・体裁・掲載する図版を考案しています。

### 古代・中世部会

○部会 4/15、7/6、11/10、平成31年2/9

○打合せ 5/18

通史編に向けて、目次案・体裁・掲載する図版を考案しています。

### 近世部会

○部会 6/30

○打合せ 7/1、10/6、平成31年1/12  
通史編に向けて目次案を考案しています。

### 近代・現代部会

○部会 4/14、6/3、11/18、12/16、平成31年2/10

○打合せ 7/1、9/15

○資料調査 6/23(刈谷市)、7/15(刈谷市)、

7/28(刈谷市)、8/5(刈谷市)、

8/17(立川市)、8/19(刈谷市)、

平成31年2/14、3/7、3/23

(24(福島市))

通史編に向けて、目次案・体裁・掲載図版を考案しています。

### 民俗部会

○部会 5/24、7/4、12/19、平成31年1/31

○打合せ 8/15、10/18、11/7

○調査・聞き取り

5/3知立まつり(撮影)、5/10

日吉山王社の馬道具・獅子屋形の

資料調査、5/13日吉山王社祭礼、

6/13西丘町、7/4撮影、7/21、8/24秋葉まつり関係調査、

9/16、9/21撮影、10/6追加調査、10/10個人向け調査

昨年度に引き続き、刊行に向けて原稿の校正作業を行っています。

### 八橋グループ

○部会 6/23、9/29、平成31年2/23  
○打合せ 8/24

○資料調査 10/2、11/22(洛東遺芳館)、12

/5(西尾市岩瀬文庫)、12/7

(国立国会図書館)、平成31年1/

29、1/30(名古屋市蓬左文庫)、

1/31(大阪市立大学)、2/15

(名古屋市蓬左文庫)、3/8(名

古屋市蓬左文庫)、3/12(東京都

立中央図書館)、3/18(大阪都

立中央図書館)

八橋に関する資料の調査・収集を進め、原稿を執筆しています。

刊行予定

『新編知立市史 別巻 八橋編』

B5判オールカラー 三五〇〇円

令和二年三月刊行予定

伊勢物語に描かれている在原業平・かきつばた・八橋は時代を経ても人々に愛され多くの文学作品に登場し、浮世絵や屏風・硯箱などの美術工芸の題材として人気を博しました。

本巻は八橋の場面を取り上げた浮世絵・美術工芸・古代中世文学・近世文学の諸作品を一堂に集め、そして八橋の復興に尽力した方巖売茶についても解説しています。今までにない八橋に特化した資料集です。

好評販売中

■新刊 (2019年 平成30年度刊行)

『新編知立市史7 資料編 民俗』

B5判 (DVD付き) 三七〇〇円

■既刊

『新編知立市史3 資料編 原始・古代・中世』

B5判二冊箱入り(付函あり)四五〇〇円

『新編知立市史4 資料編 近世』

B5判 (CD-ROM付き) 三一〇〇円

『新編知立市史5 池鯉鮒宿本陣御宿帳』

B5判 二六〇〇円

『新編知立市史6 資料編 近代・現代』

B5判 (付函あり) 四一〇〇円

『新編知立市史8 資料編 自然』

B5判オールカラー

(『植物・動物目録』付き) 四七〇〇円

『新編知立市史 別巻 文化財編』

A4判オールカラー 二六〇〇円

知立市  
ホームページを  
ご覧ください



お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係

〒四七二-1005

知立市南新地二丁目三-13 (歴史民俗資料館内)

TEL 〇五六六-八三一六七八九

FAX 〇五六六-八三一六六七五

E-mail sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp

新編知立市史だより第10号 令和元年12月1日発行

発行 知立市教育委員会文化課市史編さん係